

## 12 江戸時代按摩手技の文献的考察

○鈴木英征、青木隆明、戸野吉浩、原田和江、  
広門靖正、濱田 淳、長尾栄一

按摩は中国より伝わり大宝律令の医療制度の一科となつたが、その後、医家に注目されなくなつた。

江戸代時代に入り、人々の健康への関心が高まり、養生・按摩に関する書物が著された。江戸時代中期になり、大久保道古は『古今導引集』（二七〇七）を著し、宮脇仲策は『導引口訣鈔』（二七一三）で、医療的按摩について述べた。香川修庵は『一本堂行余医言』（二七七五）で、按摩を治療の術として用いることを唱えた。賀川玄奘は『産論翼』（二七七五）で、按摩を産科に応用した。江戸時代後期になると、按摩は庶民にとってより身近なものとなつた。藤林良伯は按摩の入門書として『按摩手引』（一八〇〇）を著し、同年、内海辰之進による按摩の専門

書『按腹伝』が出版され、次いで太田晋齋が『按腹図解』（一八二七）を刊行した。

富士川は『Die Massage in Japan』（一八九九）で宮脇、藤林、内海、太田らの書物にみられる按摩を医療的な按摩と述べた。これらの書物では全身の按摩術を詳細し、その主流は按腹であつたとしている。

本報告ではこれらの書物の手技について検討した。

全身摩擦の手技の特徴を明らかにするために、『導引口訣鈔』『按摩手引』『按腹図解』の全身按摩の部分から手技を表す用語を抽出した。

『導引口訣鈔』では「摩でる」「碎く」「解く」「動かす」「分肉解結する」「訣」「摩解する」「和げる」「甘げる」「按摩する」という用語がみられた。用語の出現頻度を「摩でる」とそれ以外に分けてみると体幹、頭部では「摩でる」とそれ以外がほぼ同程度であり、上肢、下肢では「摩でる」が多くみられた。施術は側臥位で、順序は下肢に始まり、肩背腰部、上肢、頭部、体幹部、最後に下肢で終わる。方向は主に求心性であり、遠心性の施術も含まれていた。

『摩擦手引』は絵図と文章で手技を具体的に説明している。上肢と下肢では「握る」や「引く」という用語が、頭頸部と肩背部では「曲」という用語が多く使われている。施術は坐位で肩背部から始まり、頭頸部、再び肩背部、上肢に行い、側臥位にして腰殿部、下肢で終わる。方向は遠心性であった。

『按腹図解』では「解釈」「調摩」「推圧」などの用語がみられた。頭部では「解釈」が、肩背部では「解釈」「拊循」「循拊」が、上肢では「解釈」「調摩」が、腰殿部では「解釈」「推圧」が、下肢では「解釈」「調摩」「摩解」「撫摩循下」「推圧」がみられた。施術は伏臥位あるいは側臥位で背腰部に始まり、頭頸部、肩部、上肢、背腰部、下肢、背腰部の順に行う。次いで仰臥位にして頭部から始め上肢、下肢で終わる。方向は遠心性であった。

按腹の手技を詳細に記載しているものに『按摩手引』『按腹伝』『按腹図解』がある。施術部位では『按摩手引』は胃経が多く、『按腹伝』は任脈経を除外している手技もあった。施術方法では『按摩手引』は直線的に「なでる」ことが中心であり、『按腹伝』は螺旋状など手の動作に特

徴的なものがあつた。『按腹図解』は『産論翼』を手本とすることを述べており、両書の施術法に共通性が高かつた。

施術は前胸部から始まり、終わりには胸腹部をなでている。季肋部、背腰部、側腹部へは全書とも類似した手技が使われ、腹部では櫓を漕ぐような表現が共通してあつた。腹部に対するその他の手技は各書に特徴があつた。全書で病因は「気血の滞り」とされ、按摩、按腹により気血をめぐらせることで諸病の治療を行うとしている。

(筑波大学理療科教員養成施設)